

第四屆神宮競技大會報告書 內務省



第一回明治神宮競技大會報告書

內務省

凡例

本書は第一回明治神宮競技大會開催の趣旨及
之が計劃經過の大要並各競技の狀況成績等を
蒐録編纂したるものなり

大正十四年三月

内務省



臣大務内権若

摺技露苑外宮神治明

五十五

内務大臣若槻禮次郎

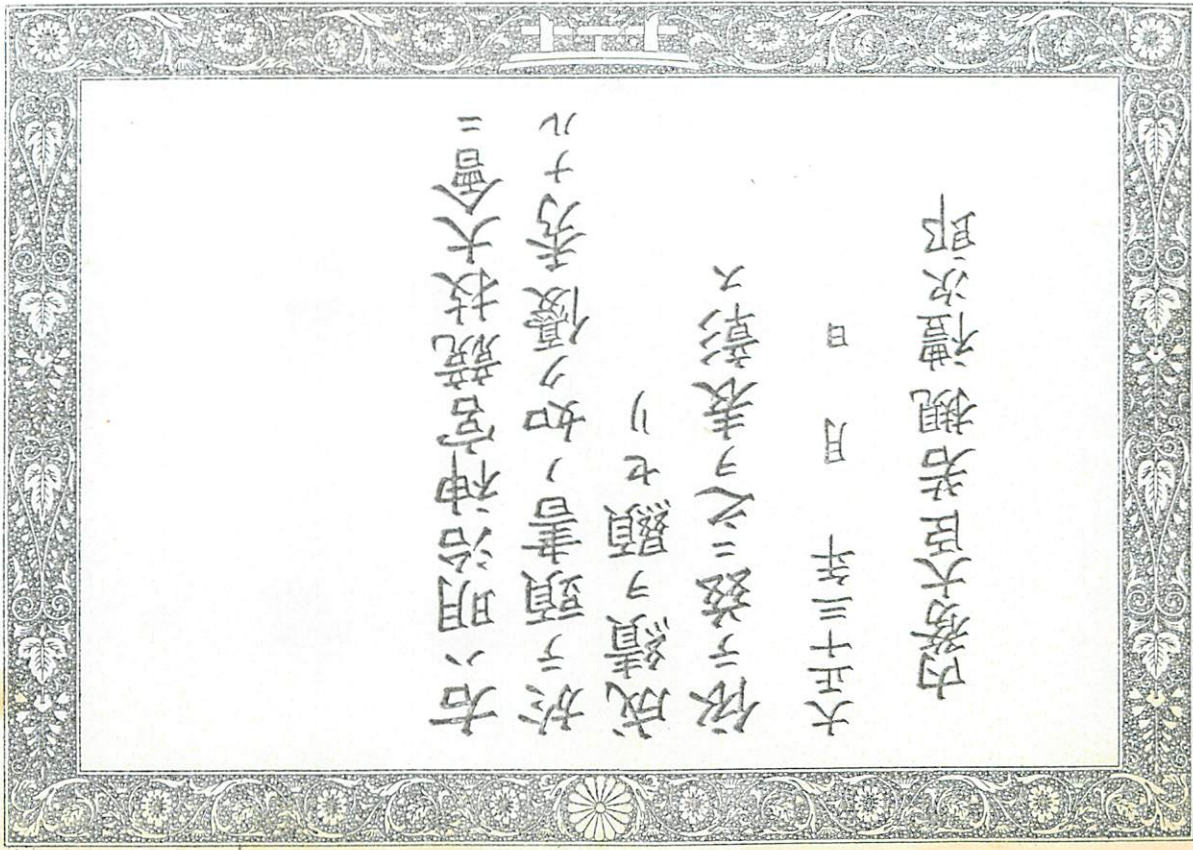
大正三年 月 日

依_テ茲_ニ之_ヲ表彰ス

成績_ヲ顯_セリ

於_テ頭書_ノ如_ク優_ナル

右_ニ明治神宮競技大會





明治神宮競技大會

10月30日・11月1・2日
 バスケットボール……神宮外苑競技場
 10月30日・11月1・2日
 ヴォレーボール……同
 10月30日
 ア式フットボール……同
 10月31日
 ラ式フットボール……同
 10月31日
 ホッケー……同
 11月1・2・3日
 陸上競技……同
 10月30日・11月1・2・3日
 テニス……帝大コート
 本場慶大コート
 10月31日・11月1・2日
 野球……早大グラウンド
 立教グラウンド
 芝公園グラウンド
 10月31日・11月1日
 水上競技……芝公園プール

11月1・2日
 ボートレース……吾妻白髭橋間
 11月1・2・3日
 柔道……神宮外苑道場
 11月1・2・3日
 相撲……神宮外苑相撲場
 11月1・2・3日
 剣道……神宮内苑道場
 11月1・2・3日
 弓道……同
 11月2日
 馬術……代々木練兵場

野球 水上競技 及 神宮外苑競技場 競技の外入場無料

内務省
 明治神宮競技大會協賛會

大正十三年

明治神宮
競技大會
蹴球競技特待券

殿

大正十三年

明治神宮
競技大會

優待券

殿

自大正十三年十月三十日
至大正十三年十一月三日

明治神宮
競技大會

門

鑑

明治神宮外苑競技場入場券

(雨天又ハ其ノ他ノ事故ニ依リ午前ノ試合四回半ヲ完了セサル場合ハ午後ノ試合ニ有効トシ午前後ノ試合合共ニ四回半ヲ完了セサルトキハ翌日有効トス)

池袋

明治神宮
競技大會
野球入場券

大正十三年十一月一、二、三日
於明治神宮外苑(晴雨ニ不拘)

明治神宮
競技大會
相撲觀覽券

第一回明治神宮競技大會報告書目次

(一) 開催の根本計劃、趣旨及要項	一
(二) 經過及組織	五
一 經過の概要	五
二 大會職員の囑託	六
三 大會職員の氏名	六
(三) 準備及計劃	一三
(四) 開 會	九〇
一 開會式	九〇
二 台臨の宮殿下	九四
三 競技種目參加選手數等	九五
四 開會中の諸事務	九六
(五) 競技各部の計劃、經過、競技狀況及其の成績等	九八
一 陸上競技部	九八

二 アツシエーション、フットボール部……………二一七

三 ラグビー、フットボール部……………二二二

四 野球部……………二二六

五 ヴァレーボール部……………二八六

六 バスケットボール部……………一九五

七 ボートレース部……………二二三

八 庭球部……………二三七

九 ホッケー部……………二四五

二〇 水上競技部……………二五二

二一 剣道部……………二七六

二二 柔道部……………二九五

二三 弓道部……………三三八

二四 相撲部……………三三八

二五 馬術部……………三三八

二六 青年團競技經過報告……………三六〇

二七 競技の成績(優勝者の氏名及レコード等)……………三九一

(六) 閉會と事後整理……………四〇八

(七) 明治神宮競技大會協賛會……………四一三

一 趣意書……………四二三

二 會則……………四二三

三 役員……………四二六

四 事業……………四二七

(四) 野 球 部

蘆 田 公 平

明治神宮競技大會が内務省主催の下に開催せられるに當つて野球が如何なるプランの下に出場すべきかが初めて其の關係者の間に議せられたのは六月の中旬であつた。最初蘆田公平、帝大。が主催者側より右に關する依頼を受け、當時東京に在住し居りし斯界の元老、内海弘藏、明大、櫻井彌一郎、神吉英三、以上慶應、押川清、小川重吉及飛田忠順。以上早大。の意見を徴したる結果、此の大會の計畫の一切を早稻田、慶應明治、法政、立教、東京帝大及學習院の各野球部より選出したる委員から成る野球委員會の決議によつて處理する事に決した。此の委員會の委員を以上の七校に限定した理由は右野球部が従来より今日迄斯界の中心勢力をなして居る權威あるものたる、今一つは全國的の催ではあるが東都に行はれるもの故地方在住の野球關係者に委員を依頼しても結局有名無實なものになることを恐れた爲である、しかして時恰も春のシーズンを終了後に當つて居たので以上の野球部中不在のもの多く正式の委員會は秋にならねば開催し得ぬ状態であつた。しかし大體のプランは少くとも夏季中に豫定して下準備にかゝらねばならぬ事も多いので免も角も七月中旬と八月二十一日の二回假委員會を開いた。第一回には前記の内海、蘆田及内村祐之、帝大。明石敏雄及川添翁、以上慶應。の諸氏、第二回には小川、蘆田及伊藤梅次郎、明大。の諸氏が列席した。此の二回の假委員會と前記の元老連の意見の下に大體次の如きプランが適當なるものと認められてそれが秋の委員會に提案せ

られる事となつた。

試合は勝抜の優勝戦として二種行ふ。即「A」は五大學及夫に對抗し得られると認む可き大學チームを最大限三つを選び夫等の學校を中心としたるクラブチームの爭覇戦。五大學以外にいづれのチームを選ぶ可きやは後日にゆづる。「B」は全國中等學校のチームより八つを選抜し其の爭覇戦である。グラウンドは五大學リーグにお願ひして借用する。チームの旅費、滞在費等は神宮競技大會初年度の規定によれば各チームの自辨とあるが中等學校の野球チームは諸々の關係上到底支辨し得ざる故除外例を求め、試合期日は三日間、等が主なる事であつた。しかして第二回の假委員會は丁度朝日新聞主催の全國中等學校野球大會終了後であつて伊藤及蘆田の兩委員は親しくそれを目撃し且つ彼の大會の際に多くの斯界の權威者の批評も聞いて居たので夫等を土臺として中等學校の八チームの中左の六校は大體彼の大會に於ける實力上の強者と認められたので、若し秋の正式の委員會にて正式に推薦せられた際には出場し得るや否やを確める事にした、即、廣島商業、神港商業、松本商業、早稻田實業、和歌山中學及愛知一中がそれである。あと二校は朝日の大會のみを全然標準にすべきや否や、又朝日の大會に豫選に敗れても強チームがあつた場合如何すべきや、推薦の標準を強さに置く可きや地方別にすべきや等に未定の點が多くあつたのでその豫備として殘し決定を與えなかつた。右の如く中學に内意を聞いてやつたのは九月の新學期よりのチームの練習を慮つてであつた。尙中學の旅費の件は全般に渡る委員會にて承認せられた、以上が大體正式の準備委員會を開くに至る迄の大體の經過である

各校より申出られた準備委員の氏名は左の通りである。

早稲田大學	久保田 禎氏	有田富士夫氏	慶應義塾大學	直木松太郎氏	桐原 真二氏
明治大學	伊藤梅次郎氏	岡田源三郎氏	法政大學	武滿 國雄氏	沼崎 一夫氏
立教大學	米田 俊治氏	廣瀬 勝義氏	東京帝國大學	蘆田 公幸氏	内村 祐之氏
學習院	大木 喜福氏	吉井 勝雅氏			

九月十二日午後六時から私立衛生會にて第一回の準備委員會が開かれた。委員側の大多數及内務省の湯澤

課長藤原保防疫官等が出席した。先づ湯澤課長及蘆田委員から大會の主旨並に従來の經過を述べた後協議に入つた。當日最も重きを置いて論議せられたのは明治神宮外苑内に野球場を建設する問題であつた。即武藏、岡田、久保田及蘆田委員より球界の現状並に従來の行懸り等から見て之が刻下の急務なる所以を説き、各々熱烈なる意見の開陳あり、殊に五大學のリーグ側にては若し此の問題が解決する見込立たざるものとせば、明治神宮競技に野球を加入せしむる事は主催者として甚だ無暴なる計劃にて且グレイヤーから云つても明治神宮競技と云ふ神聖なる氣分を起すこと不可能なれば加入が甚だ意義の少いものとなるし、之が爲に毎年リーグのグラウンドをほとんど全部提供することは出来得ない由を述べた。之に對して湯澤課長は右につき出来得る限り盡力すべきも現今の狀勢としては内務省として其の成否を確言し難い事情を説き結局五大學側の委員は内務省の意圖を大體知り得たるにまつて如何なる態度に出づるか最近日開催すべき、リーグ戦の會議迄

回答を保留する事となり従つてすべての事は未解決に終つた。但中等學校の爭奪戦については練習の都合等もあつて至急正式に決定せねばならぬ理由もあるので之について議論をすゝめたのであるが委員中に八つのチームを選抜する方針について種々の論あり。簡單なる豫選をなす可しとするもの、朝日新聞社の大會を標準とすべしと説くもの、大體を朝日の大會によるも其の豫選等に惜敗したるチームは今一度豫選せしむべしとするもの、朝日の大會に主義の相違によつて出場しないチーム中強者あらずは出場せしめよとするもの等が其の主たるものであつたが、大體に於て本年度に豫選試合を行ふことは到底不可能故朝日新聞社の大會を基とする事に決定、但朝日新聞の大會には出場せざるも相當に強チームと認むべきものを如何にすべきやに就いては次回迄其の決定を延ばす事とした。しかして朝日の大會を基とするにしてもその優勝大會に出場せし十九のチームより八を選ぶのに強さを標準とすべきか地方別にすべきか議題となり、之は別に豫選をするならば兎に角、朝日の大會がすでに地方的の優者を出して技を較べさせたものなれば今度は地方的の考を全然入れずして唯實力ありと認めるものを頭から八つ選び、其の強さ如何は委員會に於て認定する事に決定した。其他グラウンド、時日及試合方法等についても一應は意見が出たのであるがすべては次回に決定する事にし、次回はリーグ戦會議の翌日即十九日と申合せた。

九月十九日午後七時半より私立衛生會にて第二回準備委員會開催、出席者 委員側 久保田 有田、直木、桐原、山崎、法、武藏代、山根、朝田代、廣瀬、半田、吉井、大木、蘆田。

内務省側 湯澤書記官、勝俣防疾官等。

一三二

湯澤課長の挨拶ありて後リーグ側より内務省の誠意を認め喜んで本年は明治神宮大會に参加する事並に神宮競技開催中はリーグの試合は中止し、グラウンドの使用も差支なしとの申出あり。よつて議事を進め左の項を決定した。

試合日時 十月三十一日、十一月一日、二日の三日間。

試合の種類 A 大學を中心としたるリーグの争覇戦。

B 中等學校の争覇戦。

場所 第一日 早大、立教、目黒田園都市グラウンド。

第二日 早大、立教。

第三日 早大。

時刻 早大グラウンド第一日に限り午前九時より中等學校試合、正午より大學クラブ試合、午後三時より中等學校試合、其他は午前十時より中等學校試合、午後二時より大學クラブ試合。

入場料 徴集す、額はリーグ戦の規程に準ず。

而して(A)の試合に参加するチームとして早稲田、慶應、明治、法政、立教、東京帝大及京都大學の七を中心とせるクラブチームを推薦。右は現日本の最高の標準のチームとの考よりしたもので、五大學は論ない

所である。東西、兩大學の野球部は其の歴史尙淺く野球界にも充分認められて居ないが、高等學校中には古い歴史を有し現今も活躍しつゝあるものが多い、而して今回神宮競技中に各専門學校中心の試合を加入せしむべき事は不可能故、兩大學をして各高等學校の選手を自由に選ばしめてチームを作る事を許し、之に加入せしめたならばクラブ戦に新味を加へ興多からんとの見解にて五大學に兩帝大を加へたのである。しかして現選手舊選手の數は何等制限を加へないこととした。

(B)については今回はすべて準備がとつてはない時故、今回に限り全然今夏甲子園の球場に行はれた朝日新聞社の中等學校大會によつて強者を入つ推薦する事に確定、左の八校が其の榮を得る事となつた。

廣島商業學校、松本商業學校、神港商業學校、松山商業學校、早稲田實業學校、大連商業學校、和歌山中學校、愛知縣立第一中學校、(右の中大連商業學校は未だ出場するや否や不明に付若し不出場の時は鳥取第一中學校を推薦)

試合組合せ 全部抽籤による。

尙中等學校の選手の資格は朝日新聞の大會の規定に大體準することになつた。

以上が當日決定された主なるもので之で本年大會に参加する野球のプランが確定せられたわけである。よつて翌二十日新聞社に発表、各學校へは夫々推薦狀を發送した。次いで蘆田委員は明治神宮外苑内に野球場の建設促進に關し運動記者俱樂部に計り、其の有志太田茂(運動界社)小島敬三郎(報知)の兩氏及東京中學リ

松本	十月三十一日	勝者
廣島	午後〇時半於立教	
和歌山	十月三十一日	勝者
大連	午前十時於田岡都市	
	十一月一日	勝者
	午前十時於早大	

右の組合中偶然乍ら夏の中等學校の最優勝戦となつた松本對廣島及多大のファンを熱狂させた早實對神港が土地を變へて行はれる事になり彌が上にもファンの興味をそゝつた。又三十日の入場式にプレーヤーの代表として宣誓をなすは抽籤によつて法友クラブの武滿國雄と決した。尙三十一日の始球式は三ヶ所に行はれるので恐らく球界未曾有の事であらうが早大では若槻内務大臣、立教では片岡内務政務次官、田岡都市では中村東京市長が當られる事となつた。

尙大會役員中野球部に關係せらるゝ方は左の通りである。

- 大會顧問 安部 磯雄(早大野球部長)
平沼 亮三(慶應出身)
- 大會野球部顧問 長興 又郎(東京帝大野球部長) 中澤 良夫(京都帝大野球部長)
小林 澄兄(慶應野球部長) 大槻 讓二(明治大學野球部長)
杉浦貞次郎(立教野球部長) 小西 憲三(法政野球部長)

- 内海 弘藏(明大) 押川 清(早大)
小川 重吉(早大) 飛田 忠順(早大)
神吉 英三(慶應) 島田 善助(慶應)
小山 萬吾(慶應) 中野 武二(帝大)
柳生 基夫(學習院)

既記ノ通り

準備委員
競技委員

- 明大 伊藤梅次郎 岡田源三郎 小西 傳郎 大澤 逸郎 大門 憲文
二出川延明 谷 澤 梅 田 山根 輝彦
慶應 直木松太郎 小柴 大輔 新田 恭一 明石 敏雄 桐原 真二
川添 翁 野坂 三郎 物集謙太郎 池田 豊 太田 一郎 久保田 禎
早大 淺沼 譽夫 市岡 忠男 池田 豊 井上 正夫 高田 増三
山崎 武彦 宮崎 光祐 有田富士夫 沼崎 一夫 俣野 勇
法政 武滿 國雄 内宇 應道 植田 忠良
萩原 兼顯 山崎 正人

立教	柴田俊次	太田清一郎	廣瀬勝義	川島秀一	二神武
帝大	永田廣二	橋本河夫	水谷喜久男	元貞	岡崎孝幸
	茂田公平	内村祐之	壯司信守	寛	
學習院	島田敏	筒井竹雄	津田健太郎	大木喜福	石山英夫
	吉井勝雅	佐々木行篤	木越進		

早稻田實業對神港商業(早大球場)

中等學校爭霸戰 第一日(十月三十一日)

早大球場に於いての第一戦は今夏甲子園に於て最もメアンの人気を呼んだ早實と神港の對戦である。早實に取つては雪辱戦で、夏肩を痛めて不振であつた投手水上の肩もすつかり恢復し、加ふるにホームグラウンドの事とて選手の意氣は彌が上にも高調して居た。之に對する神港は其の中等學校チームとは思へぬ位の打力に充分の自信をつけ、再び水上の球を亂打して敵地のメアンの島をかさうと意氣衝天の概がある。試合前顧問安部早大野球部長から兩軍の選手並に一般のメアンのに訓辭あり、續いて若槻内務大臣の始球式あつて決戦の序幕は開かれた。球審内村、墨審並司。

第一回(早實先攻)、山口四球を選んだが以下三者凡死して事なし。

經過

(神港)樹本四球、泉谷右翼安打、三谷のSS、ゴロ、岩淵失して無死満塁、しかも打者は今夏打撃の神として馳名を轟かした山下である。ピンチは劈頭に早實を見舞つた。しかし水上あせらず、山下の弱をついて之を三振にはより續く町田を一飛丸泉を遊劔に止めて巧みに危機を脱した。

第二回 兩軍無爲。

第三回(早)一死後山口再四球を利し直ちに二盗、加藤巧みにバントを弄して内野安打となり好機至る、神山の投劔に山口本塁に死せしも、續く水上一三後に絶好の三塁打を中右間に放ち加藤、神山兩躍生還、意氣頓に上る。岩淵三劔。

第四回(早)一死後七里、三越安打を放つたが二盗に刺されて物にならず。

(神) 山下四球を利して二盗したが以下三者凡退に事なし。

第五回(早)一死後山口三度四球を得、加藤のIBゴロに二塁に封殺せられたが神山のSBゴロ墨手失してピンチに再び水上が立つたが二飛に止む。

(神) 久保四球、小柴本本の凡死後、泉谷右翼に三塁打して久保生還。續く三谷左翼に大飛球を送つたが七里好捕して一點に止める。

第六回 神港の町田の安打、第七回早實高橋の安打ありしが共に事なし。

第八回 (早) 神山三匍暴投に二壘に至り水上の投匍フイムグーチロイスとなりて兩者生き、岩瀬の右飛に神山生還。決勝の一點にて頗る怪しい。

(神) 泉谷の三匍、壘手低投して生き三谷3B越の二塁打を左野に放ち、早實の危機が至つた。しかも水上悠々迫らず強打者山下を四球に送り町田を投匍に止めて走者を本壘に刺さんとしたが神山落球して泉谷生還尙好機であつたが九泉三振、島のバンドに惜しくも三谷本壘に刺され久保三振して止む。

第九回 (早) 三者無爲。

(神) 最後に總攻撃をと奮起したが水上、巧みに小柴樹本を三振にはより泉谷の二匍に萬事休し、三對二の大接戦を以て第一の凱歌は早實軍に上げられた。

雜 観

▲若槻内務大臣の始球式は堂々たるもので狙ひも誤らず一バウンドで捕手のミットに収まつた。上々の出来である。

▲早實神港の實力は全く拍仲して居る。投手力に早實まさり、打力に神港は一段の長がある。夏は甲子園で神港が勝ち、秋は東京で早實が勝つた。名古屋あたりで此の決勝戦を見たらさぞ興深い事であらう。

▲早實の勝因は水上の好守兩方面に涉つての健闘の賜である。今夏振はずして、あたら名投手の名も光を失はんとしたが今日の働ですつかり男を上げた。悠々迫らぬあの堂々たる投手振と云ひ、ピンチに際しての

明晰な頭腦の働と云ひ、大偉勳を立て、も少しも功にはこる様のない床しい態度と云ひ、全く申分のないプレーヤーである。他日の大成を待って居る。

▲神港の敗因は夏の成績を基として全然ヒツティングに出た點にある。當然の策戦ではあるが今少しく細かく攻めたら水上も可成苦戦したらう。夏水上の球を亂打して中等學校の打撃王となつた怪物山下が第一回に三振した全く惜しい。夏のたよりである。

▲ベンチコーチは早軍は淺沼、神港は高須の兩大家で夏以來の頭のしぼり合ひ、いさゝかのゆるみもない策戦振。玄ハ筋と取つては面白い見物であつた。殊に第七回早軍の高橋が安打に出てバンドに送られ次に左打者が二人續くと云ふ際左利の山下を投手板に送つた高須君の策戦は流石と思はれた。

大連商業對和歌山中學(田園都市球場)
野球記録表

投手	打者	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
新木	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
奥谷	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
三谷	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山下	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
町田	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
丸岡	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
島	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
久保	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小栗	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

投手	打者	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
山田	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山田	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山田	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山田	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山田	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山田	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山田	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山田	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山田	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

大連商業對和歌山中學(田園都市球場)

大連商業は夏の大會に準決勝戦まで滑ぎつけ最優勝の廣商を土俵際まで追ひつめた元氣満ちたるチーム、殊に今回は中澤、谷口の二名將がベンチにあつて一軍を統率して居る。和歌山は夏第一回に廣商に惜敗したとは云へ實力に於て第一流の尤たるものと折紙をつけられた強チーム、初顔合せの興味津々たる取組である。中村市長の始球式に職は開かれた。球審野坂、壘審川添。

經過

第一回 (和歌山先攻)三者凡退。

(大連) 一死後齋藤四球を利し石原の右飛後、本石三遊間の安打に貫き続く杉浦第一球を中右間に二塁打して一點を先取す。野田の球が何となく定まらぬ。

第二回 (和) 由良四球野田のバンドに送られ西本の遊歩野手失して外野に轉々する中に由良一擧本壘を衝いて寸前に刺されたは氣の毒。小川右野に二塁打して西本生還同點となる。

(大) 二死後、二壘手の連失に永田、奥出壘、齋藤適時安打を右野に放つて永田生還一點をリードする。

第三回 (和) 一死後田島安打に出で二盜せしも二者凡退。

第四回 (和) 三者凡退。

(大) 二死後、肥塚一壘内野安打に出で續く永田、奥の兩者、共に右翼越の三壘打を放つて堂々二點を取り、大連の意氣冲天の概がある。

第五回 (和) 小川奮然右野に安打し、高橋、濱口に送られて三進、投手の暴投に一點を恢復す。

(大) 無爲。

第六回 (和) 寺井左前に安打せしも焦つて二盗に倒れ、山本三振後由良四球、野田の右翼難飛球野手失して走者三二壘に在り好機は和軍に見舞つたが西本二直に死して得點なし。

(大) 三者凡打。

第七回 (和) 小川三度安打に出で高橋に送られたが濱口の遊直に併殺の憂目にあふ。

(大) 一走者を出したるのみ。

第八回 (和) 山本中右間に二壘打を放つたが物にならず。

(大) 二死後櫻井SS安打、沖の三匍野手選擇となり、續いて永田、奥の凡打を和歌山の壘手連失して大連の二者生還。和中致命傷を負ふ。

第九回 和中奮起したが石原投手に倒せられ僅に西本が死球に出で二盗せしのみ。七A對二にて勝利の榮冠は海を渡つて遠征の將士の頭上に輝く。

概 観

▲中村市長の始球式もゴロではあつたが狙は正鶴中々見事であつた。市長は運動家だけあつて試合を最後まで力を入れて見物せられ、昔滿鐵で縁故のある大連が優勢なのに隨つて居られた。

▲和中の大敗は全く豫想外であつたが投手野田が肩を痛めて活動意の如くならなかつたのと意氣あがらずして守備に凡失があつた爲である、殊に主將田島が第四回に肥塚の1Bゴロをぐすくして内野安打にしたのと第八回二壘よりの送球を落して敵に二點を入れたのとは主將であるだけに影響する所が大きい。

▲打撃も全く石原のカーブに封せられて振はなかつた。但此の不振の和中にあつて若冠小川が三安打を出して氣をはいたのは特筆する價值がある。

▲大連はよく野田の球を當て、殊にピンチに強かつたのは敬服に値する。時に幾分粗慢に流れる態度はあるが元氣潑瀾として居て見るからに心地がよい。

大日本野球連盟主催 内務省 大正十三年十月三十一日

野球記録表

(大正十三年十一月一日)

チーム名	投手	捕手	一塁	二塁	三塁	四塁	五塁	六塁	七塁	八塁	九塁	十
愛知一中	中村	伊藤	西村	水野	酒井	松山	岡野	松	松	松	松	松
松山商業	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山
合計	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2

愛知一中對松山商業(池袋球場)

光榮ある古き歴史を有し勝負強い東海の覇者愛知一中と、剛球投手中村を有し豪放なる意氣を有する四國の盟主松山商業とは亦見逃す可らざる好取組である。片岡政務次官の始球式鮮かに此の好試合の幕は切つて落された。球審岡崎、壘審筧。

第一回 (愛知先攻) 二死後間下右翼に二壘打を打ち續く水野、伊藤共に中村の剛球を巧みにあて、中堅に安打し、間下生還、續く岡野四球西村一二壘間にタイムリーヒットして水野生還、酒井は三振に倒れたが劈頭二點を先取して意氣頓に上る。

(松山) 二死後森中右間に三壘打を放つたが森本三振して止む。

第二回 兩者無爲、名古屋伊藤投手の出来榮が甚だよい。

第三回 (愛) 間下四球、水野遊三間の安打に再好機を作つたが續く伊藤、岡野の遊匍をSS好守し西村CF飛球に死して入らず。

(松) 無爲。

第四回 愛知に廣瀬の安打、松山に森の安打が出たが共に後援空しく凡退。

第五回 兩軍三者凡死。

第六回 (愛) 岡野遊匍一失に出で西村のバンドに送られたが事なし。

(松) 一死後中川中堅安打に出で快足を利して二壘に到り楯の三匍に送られて三壘にあり、續く強打者森四球に敬遠せられた時兩者相闘りダブルスチールを敢行したが惜しいや中川は本壘前間一髪にて憤死す。

チーム名	投手	捕手	一塁	二塁	三塁	四塁	五塁	六塁	七塁	八塁	九塁	十
愛知一中	中村	伊藤	西村	水野	酒井	松山	岡野	松	松	松	松	松
松山商業	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山	松山
合計	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2

大日本神宮野球大会

野球記録表

（昭和十一年十一月）

チーム名	投手	捕手	一塁	二塁	三塁	四塁	五塁	六塁	七塁	八塁	九塁	打者	打数	安打	二塁打	三塁打	本塁打	得点	打点	犠打	犠飛	エラー	盗塁	盗塁成功	捕逸	内野安打	外野安打	併打	三振	四球	凡退	試合時間	観衆
愛知	片岡政務	伊藤	中川	橋本	西村	酒井	石川					中川	10	4	6	4	2	0	0	1	7	8	3	0	0	2	7	0	1	27	9	0	1
松山	中川	橋本	西村	酒井	石川							片岡政務	10	4	6	4	2	0	0	1	7	8	3	0	0	2	7	0	1	27	9	0	1

チーム名	投手	捕手	一塁	二塁	三塁	四塁	五塁	六塁	七塁	八塁	九塁	打者	打数	安打	二塁打	三塁打	本塁打	得点	打点	犠打	犠飛	エラー	盗塁	盗塁成功	捕逸	内野安打	外野安打	併打	三振	四球	凡退	試合時間	観衆
愛知	片岡政務	伊藤	中川	橋本	西村	酒井	石川					中川	10	4	6	4	2	0	0	1	7	8	3	0	0	2	7	0	1	27	9	0	1
松山	中川	橋本	西村	酒井	石川							片岡政務	10	4	6	4	2	0	0	1	7	8	3	0	0	2	7	0	1	27	9	0	1

第七回 松山の高須賀二塁打に出でしのみ。

第八回 (愛) 水野三度安打を右野に送つてチャンスを作り伊藤に送られ岡野のCF安打に生還。一點を加ふ。

(松) 池内、橋の二安打ありしが、中川及森の好打は愛知の外野手に皆好捕せられて點を成すに至らず。

第九回 (愛) 石田四球、廣瀬の遊歩に封殺、廣瀬は巧みに二盗したが後援續かず。

(松) 最後に憤起せずんば零敗の耻を蒙らねばならぬ、森本憤然中右間に二塁打したが焦つて三塁まで走

り廣瀬の好投にさゝれたのは松山方にとつて痛恨の極であつた。中村續いて右安打したが高須賀、萩原共

に凡飛球を打上げて一塁手の功に歸し、三對〇の快勝に愛知軍中凱歌の聲が高い。

観

▲片岡政務次官の始球式も中々鮮かな出来栄であつた。三つの始球式が共に見事に行はれて明治神宮の野球の幸先が頗るよい。

▲兩軍技術備伯仲、終始緊張した好試合であつた。松山の敗は全く運がなかつたのだ。

▲兩投手共に健闘して中學チームの投手としては立派な出来栄である。殊に伊藤投手の球さばきは夏より一段の進境を見せて居た。中村投手の剛球は稍スピートが落ちた様に思はれた。

▲松山の打撃は中々強いが稍粗雑である。愛知は元氣よく揃つて當て主義を取つて之が大いに成功した。チャンスを巧みにとらへたのは傳統的の強味と高松コーチのお影であらう。

▲六回目の中川のホームスチールの失敗と云ひ前後の森本の三塁で死した時と云ひ全く極どいプレーで松山軍は嗚呼の悪い事であつたらう。實際松山は今少しく洗練されたらすばらしく、チームになり得る。

今夏甲子園で最優勝を就つた兩チームは又もやこゝで顔合はせる事となつた。人氣の此の試合に集中したのも無理からぬ事である。名投手濱井を中心に好守共完備した廣商軍が再勝を占めるか、秋に入つて併早大主將の松本氏を聘し懸命の練習を積んだと云ふ松本に凱歌が上るか全く豫想のつかぬゲームである。球審武満のプレーボールの聲と共に萬雷の如き拍手起る中に戦は開始せられた。壘審森原。

経過

第一回 (廣商先攻) 梶上三振後、杉田右安打に出で吉濱の三割に封殺されたが濱井、豊田相次いで四死球に出で二死滿壘。森岡大いに期待せられたが三割壘手の功に歸して終る。

(松本) 小林四球、米澤兄のバンド内野安打となり西村の遊歩野手選擇となつて無死滿壘手塚左翼飛球に死んだ後、上條の中飛犠打となつて小林生還。幸先よき一點を先取す。

第二回 兩軍凡死。

第三回 (廣) 一走者を出したるのみ。

(松) 一死後米澤(兄)左翼越の三壘打を放ち西村の中堅適時安打に生還、一點を加へて信州男兒の意氣大いに昂る。

第四回 (廣) 一死後森岡死球巨大滝花山遊撃越の安打に出で佐々木の左飛後中島亦死球を喫して強打者梶

上責任打者として立ち、好機到來したかと思はれたが天廣商に幸せず一割に倒れて無念の涙を吞む。

(松) 伊藤の安打ありしのみ。

第五回 廣島に濱井の二壘打、松本に小林の安打があつたが共に入らず。

第六回 兩軍無爲、唯投手の健闘のみ。

第七回 (廣) 梶上二壘打を放つたが後援續かず。

第八回 (廣) 一走者ありしも點を成さず。

(松) 小林劈頭三壘打を中堅に送つて氣勢上り米澤(兄)の三割に小林生還、計三點となりて最後のインニングに入り松本方踊躍守備につく。

(第九回) (廣) 最後の攻撃である。此儘むざ／＼破れんか光榮ある夏の勝利を汚す事となる。打順は悪い佐々木三振、中島頑張つて四球を利し好打者梶上右翼に絶好の安打を放つて走者三、一點に據り廣商得意のネバリを發揮し杉田の遊歩に中島生還。吉原、滿身の力をこめて猛打すれば物凄ミライナーとなり中堅に飛び、すは事と思はれたが米澤(兄)巧みに前進この難球を掌中にして松本軍の雪辱見事に成る。三對一。廣商軍の悲憤の涙に同情の念を禁じ得なかつた。

概観

▲廣商は夏の大會に優勝して居るだけ戦ひにくかつた。夏の大會の折に比するに激潮たる元氣が餘程缺けて

内務省主催神宮競技大會
野球記録表
1912年10月31日
第一号

投手	打者	安打	二塁打	三塁打	本塁打	犠打	犠飛	盗塁	触塁	併殺	三振	四球	暴投	失点	失誤	得点	打点	打席	打数	アウト
...
合計

投手	打者	安打	二塁打	三塁打	本塁打	犠打	犠飛	盗塁	触塁	併殺	三振	四球	暴投	失点	失誤	得点	打点	打席	打数	アウト
...
合計

居る様に思はれたのは其のために堅くなつたので誠に御氣の毒である。しかし出にくい所を東京都は出降せられてこそ其のスポイツマンである。吾人は先づそれに敬服し今日の敗戦に同情する。

▲濱井投手の出来も真程でなかつた。殊に球のコンピネーションが悪かつた。しかし其の體格と云ひ、其の球速と云ひ、カニアと云ひ天晴中學投手界の大立物たる事は首肯される。ひたすら將來の大成を祈る。

▲松商ナインは全く緊張し切つて居た。信州男兒の意氣が充分にあらはれて全く頼もしかつた。

▲伊藤投手の出来は殊に凄でかつた。緩急自在のカニア高めめのインシュット、低目のアクトコナリを過ぎカニア、其のコンピネーション。一として狂はず、勝因の大部分は岡君に肩にかつて見えた。しかし其の後に中野界切つての名捕手手塚君あるを忘れてはならぬ。

▲其他梶上、西村米澤(兄)等の打撃が光つて居る。松本の内野の堅實な守備も東都のミアンの目を驚かし

松本商業對大連商業(早大球場)

前日強敵廣商を破つて意氣軒昂たる松本と和中に大勝して野心満々たる大連とは之れ亦興味つきない好取組である。しかして兩軍共に元氣の充溢したチーム同士で技は松本稍まされりとの一般評ではあつたが大連は相手に取つて誠にやり悪いチームであるからどうなるか全く豫想のつかない試合であつた。果して戦始まるや變化極めて多く恐らく興趣の點から云つたら神宮競技中の隨一であつたらう。球審池田、壘審安藤(早大選手)兩軍緊張裡に戦は開かれた。

概 過

第一回 (大連先攻) 一死後齋藤右野安打に出たが後投續かず。

(松本) 小林四球、米澤(兄)投飛後、西村左翼越の三塁打を打ち、小林生還、手塚三振、伊藤のSSゴロ奥失して西村生還、續く上條2B越の安打をしたが五味三振に止む、二點先取して松本意氣上り、大連如何にせしか例の元氣が出ない。

第二回、から四回に至る間兩軍投手の技拵えて三者凡死するのみ。殊に大連の石原投手は獨特のカーブを以て全く松本を牛耳り第四回の如きは三者三振すると云ふ状態であつた。

第五回 (大) 沖四球にて出塁せしのみ。

第六回 (大) 松本の伊藤投手が稍緩んだに乗じ大連の總攻撃が行はれた。永田先づSSを破つて出で續く奥が右中間に三塁打して永田生還、更に齋藤とのスクキーズプレー成功して奥生還、二點を奪取して同點となり試合の興趣頓に加はる。

(松) 無爲。

第七回 兩軍投手に制せられて松本方に死四球にて二走者出でしのみ。

第八回 兩軍の投手の技は愈々汗えて壘を踏む者なく緊張し切つたる兩軍は愈々最後のインニングを迎ふ。

第九回 (大) 齋藤好運なる三塁打を右野に出し、石原三振後、本石とのスクキーズプレー見事功を奏して齋藤生還。杉浦の2Bゴロは本石を封殺したが櫻井一、二間安打にて更にチャンスを作る、沖三振、貴重なる一點を占めて大連軍中に喜ばみなぎる。

(松) 松本も奮起して伊藤安打に出たが上條1Bゴロ伊藤を封殺し更に五味のSSゴロは上條を封殺して二死、勝敗は決したと思はれたが米澤(弟)四球を利ラストの青木懸命にねばつて二、二後の球を猛打すれば球は左中間を破つて絶好の三塁打となり、四A對三、松本最後の勝利を占めた。松本軍の歡喜、大連軍の失望、いづれもさこそと思はれた。

概 観

▲大連は何處となく元氣がなかつたが中途より盛り返し最後の勝利をしめるかと思はれた。それが奇蹟的の

内務省主催神宮競技大會
野球記録表
昭和十三年十一月一日

選手名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	合計
奥島	1	3									4
石川			1	2	3	2	3	1			12
木下				2	3	3	1				9
杉浦					1	1	2	1			5
津					2	1	2	3			8
尾花					1	3	1				5
栗田					2			2			4
合計	0	0	0	0	0	2	2	2	2	1	15

三塁打によつて勝敗の數を轉倒せしめられて全くあきらめがつかなくなつたであらう。夏も廣商にゲームに勝ち乍ら惜しい敗を取り、今日又此の悲運に遭つた。同情の至に堪へぬ。

▲石原投手は第一回をのぞき誠に素晴らしい出来であつた。彼の大膽な投球振と意地悪いカーブとは全く中學選手を苦しめるに充分である、之に配する本石捕手も元氣があつて誠に似合ひの好バッターである。

▲松本は昨日同様好運に恵まれた。最後の青木の三塁打は金鷲勳軍功一般に値するが之も青木の打力と云ふより信州ナインの意氣のこもつたものと云へよう。

▲これは兩軍よく奮闘した、ベストを盡して敗るゝは人力の如何とすべからざる所大運軍敗れて決して耻す所はない。

選手名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	合計
奥島	1	3									4
石川			1	2	3	2	3	1			12
木下				2	3	3	1				9
杉浦					1	1	2	1			5
津					2	1	2	3			8
尾花					1	3	1				5
栗田					2			2			4
合計	0	0	0	0	0	2	2	2	2	1	15

早稲田實業對愛知一中(池袋球場)

一五八

早實對愛知も技倆から見ると時は絶好の取組と云はねばならぬ、勝敗の分岐點は兩軍の元氣如何と兩投手の出來筈である。此の口愛知軍は前日の戦に疲勞してか更に元氣なく早實の水上に全く打撃を封せられて慘敗を喫つた。次に其の經過の概要を記さう。

經過

第一回 (早實先攻) 兩軍無爲。

第二回 (早) 二死後敵三塁手の連失によつて二走者を出せしのみ。

(愛) 二死後岡野安打に出でしも二盗せんとして刺さる。

第三回 (早) 二死後加藤中堅安打に出で二盗し、神山の中堅安打に生還。水上の三匁塁手失して神山生還二點を先取る。

(愛) 西村一塁ゴロ其の失に出で、酒井のバンドに送られ石田三振後、廣瀬の適時安打に西村生還。

第四回 兩軍に各一安打ありしのみ。

第五回 兩軍三者凡死。

第六回 (早) 田丸劈頭CFに安打したるも盜塁に死し、七里中堅飛球に死したる後高橋四球山田の遊匁を二塁手失して二走者を出す山口一匁に止む。

(愛) 無爲。

第七回 (早) 一死後神山四球、水上遊三間の安打、岩瀬LFフライ、田丸四球の後七里タイムリーヒットをLFに飛ばして神山、水上相次いで生還勝敗の數定まつたかの觀があつた。

第八回 (早) 加藤の四球後神山、水上連続安打して更に一點を加ふ。

第九回 七里、高橋安打を連發し、山田のバンドに各塁を進め山口の2Bゴロに七里生還、合計七點を算するに至つた。之に反して愛知軍は全く水上の怪腕に封せられて七回以後皆凡退し僅に最後の回に間下が四球を利せしのみ。かくて凱歌は早實の軍中に上つた。

概観

▲戦の前半は相當に緊張して面白いゲームなるかと思はれたが愛知は前日の對松山戦に全く疲勞して後半更に力出せず、大敗した。

▲伊藤投手の肩も前日の戦とは見違えるばかり弱つて居て殊に七回以後は氣の毒な位であつた。

▲之に反して早實は水上の球威益々重きを加へ樂々と戦つて樂々と此の強敵を屠つた。之れやがて次の日に松商に克ちし最大原因であつて、大連に苦戦した松本とは餘程力をセーブし得たわけである。

大日本野球連盟主催 野球記録表

（昭和十一年十一月）

1931年11月1日 於地蔵堂球場

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
山 1	1	2	2	3	3	1	2	2	3
加 2	2	3	3	1	1	1	1	1	1
神 3	3	1	1	1	1	1	1	1	1
水 4	1	1	1	2	1	1	1	1	1
岩 5	2	1	1	1	1	1	1	1	1
田 6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
七 7	1	3	1	1	1	1	1	1	1
高 8	3	1	1	1	1	1	1	1	1
山 9	1	1	2	1	1	1	1	1	1
合 計	0	0	2	2	2	3	5	6	7

第三日（十一月二日）

早稻田實業對松本商業（早大球場）

神港、愛知を撃破した早賀と廣商、大連を打破つた松本とは二日午前十時から戸塚の球場に雌雄を決する事となつた。技倆全然兄たり難く弟たり難きもの、一方に水上を有すれば他方には伊藤あり、コーチとして淺沼氏が早賀のベンチにあれば松本には杉本氏あり。いづれから見ても興味湧くが如く要するに勝敗の鍵を握つて居る運命の神にあらざればいづれを勝と、豫定し得ない好勝負である。これより先 秩父宮殿下には御臺臨遊ばされ選手の緊張味彌が上にも加はる、安部顧問、飛田、藤田兩委員御説明を申し上ぐ。試合前安部顧問よりファン及選手に對して訓辭あり。球審桐原、壘審野坂、青木（慶應選手）

經過

第一回（早賀先攻） 山口劈頭中堅安打に出で、氣勢を添へ加藤四球。神山打者の時加藤焦つて捕手につり出され一、二塁間に狭殺さる、此の間に山口は三塁に至る、神山死球直ちに二打す、水上衆望を荷ふて立つたが伊藤巧みに三振に打取り岩瀬SSゴロに倒れて杉本第一の危機を脱す。

（松本） 二死後西村RFに二塁打し手塚の三越二塁打に生還伊藤CFフライに死んで手塚スタンディング。一點を先取して幸先がよい。

第二回（早） 一死後七里の安打ありしも後援續かず。

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
山 1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
加 2	2	3	1	1	1	1	1	1	1
神 3	3	1	1	1	1	1	1	1	1
水 4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
岩 5	2	1	1	1	1	1	1	1	1
田 6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
七 7	1	3	1	1	1	1	1	1	1
高 8	3	1	1	1	1	1	1	1	1
山 9	1	1	2	1	1	1	1	1	1
合 計	0	1	1	1	1	1	1	1	1

(松) 一死後五味安打したが米澤(弟)のSSゴロに封殺せられ青木右飛に死ぬ。

第三回 (早) 三者凡退。

(松) 小林遊圃一失に出で米澤(兄)の犠打に送られたが後二者凡退。

第四回 (早) 水上第二球を中堅越の三塁打して岩瀬のSSゴロに生還。同点となる。

(松) 伊藤、水上に負けず左越三塁打し上條の死後五味の遊撃安打に生還、一點を加ふ。

第五、第六兩回兩軍無爲にて激しい投手戦が行はれる。

第七回 (早) 一死後七里先づ投手を抜く安打に出で續いて高橋三遊間を貰いてチャンスを作る。次に早賀は左打者小林をピンチヒッターとして出し、此の策戦が圓に當つて三塁の右を強襲する二塁打となり、七里生還。續く山口右翼に三塁打を放つて高橋小林を入れ松本軍に致命傷を與へ已れも加藤とスクーター成功せしめて還。一舉四點を強取した。

(松) 奮起し五味第三回日のヒットを放つたが後援續かず。

第八、第九 兩回兩軍奮闘したが共に投手にはさまれて凡退し名譽ある第一回神宮競技中等學校優勝の榮冠は早稲田實業の選手の上に輝く事となつた。

雜 観

▲戦前の豫想は投手幾分水上優り、打撃は松本に一日の長がある。要するに水上の出来栄が當日の勝敗を決

すると云ふのが玄人筋の観測であつた。

▲水上投手は前二日に比し幾分の疲れが見へたと云へ最後迄味方をしめて泰然たる態度で進み一絲亂れぬ投手振を示した。誠に敬服に値する。しかも最初に三塁打を放つて最初の一點を取り味方の意氣を鼓舞した。早賀が優勝して久方振りで東京の中學が氣焔を上ぐるを得たのは全く彼の力によるものと云つてよい。

▲第七回の七里の安打、山口の三塁打、共に大殊勳である、あの際敗目を左の小林に代へた皮肉の策戦がマシマと奏功して松本の堅陣を全く亂した。ベンチの功與つて大いに力ありと云ふべきだらう。

▲松商もよく奮闘した。敗れたりとは云へ堂々たるもので餘蘄ありと云へやう。勝敗に拘泥する必要は更にない立派なものだ。

▲伊藤投手が三日間の連投で球速の衰えた事は強球を得意とする投手には御氣の毒の至りで水上投手よりも其の影響が大きい様であつた。球の變化を研究せられたら大投手の列に入る事は請合である。手塚捕手はよい。恐らく全國中學中で一であらう。

▲其他西村主將と云ひ米澤兄と云ひ、小林と云ひよく働いた。若冠五味が三安打を出したのは末頼もしい。

▲松本商業がかく立派な成績を上げ得たのも背後に米澤校長の如き運動好きの名校長を有する御影であらう。即米澤兄弟は其の愛息であり身を以て運動を奨励して居られる。松本商業の選手諸君は尤も恵まれたものと云つてよからう。

明治神宮競技大會協賛會收入調

	金額	備考
陸上競技	二二、五〇一、二五〇	十月三十日より十一月三日に至る前賣切符代、青年會六六七、美滿津商店二八、三三〇私立衛生會六六、八八〇を含む
水上競技	六一六、五五〇	十月三十日及十一月一日
野球	一六、九四三、四六〇	十月三十日より十一月二日に至る田園都市、立教、早大の三グラウンド
プログラムテニス	三四、九〇〇	十月三十日より十一月三日に至る帝大、慶大の二コート
同 陸上競技	一、四五八、四五〇	十一月一日より十一月三日に至る
同 相撲	三五九、七七〇	十一月一日より十一月三日に至る
雑収入 テニスボール賣却代	一二六、〇〇〇	
同 預金利子	二〇、三六〇	
獎勵費	一、〇〇〇、〇〇〇	農商務省及帝國乘馬協會より各金五百圓宛獎勵金
寄附金	一七、〇〇〇、〇〇〇	明治神宮祭奉祝會より
計	六一、一一〇、七四〇	

支出は尙整理中にて登載の運に至らず

大正十四年三月二十八日印刷
大正十四年三月三十一日發行

内務省衛生局

東京市芝區新櫻田町十九番地

印刷者 松本貞吉

川崎市堀川町四十二番地

印刷所 金洪舎川崎工場